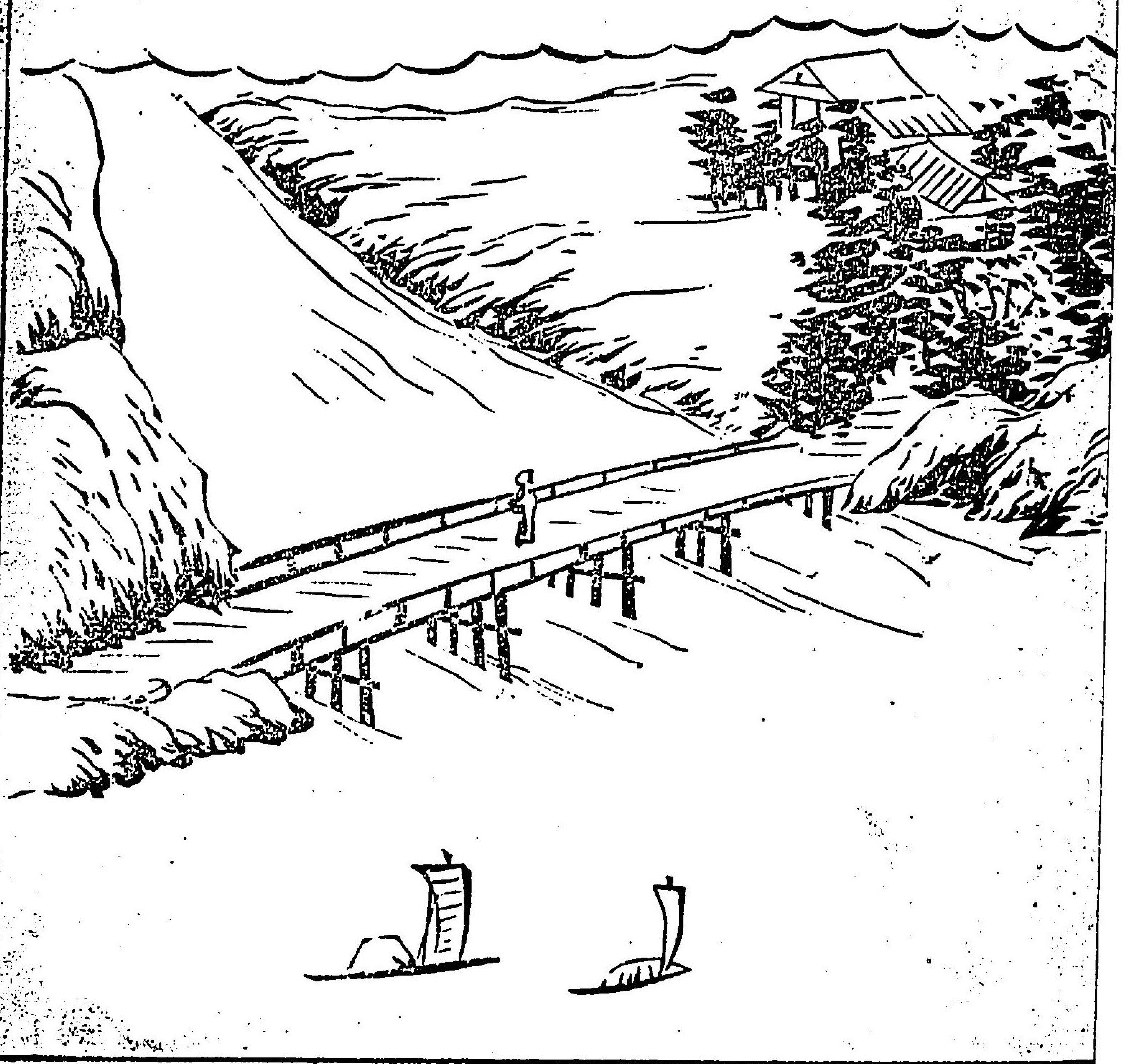
セ×506

150
432

荘内案内記



特29
485

庄内案内記

緒言

抑庄内ト稱スルハ羽前羽後ノ西北隅ニ位スル東西田川飽海三郡ノ總稱ナリ地勢東南北ノ三面ハ高山峻嶺重疊シ西一方海ニ面シ其間名所舊跡頗ル多ク加フルニ海陸ノ物産ニ富ミ而シテ又一種ノ風俗ヲ爲ス實ニ之レ奥羽ノ公園ト云フモ誣言ニアラサルナリ故ニ毎年庄内ニ歴遊スル人幾千万人ノ多キニ至ル然リト雖モ不知案内ノ地ニ入リ僅少ノ日數ヲ以テ名所風俗等ヲ探ラントスルヤ恰モ暗中物ヲ索ルカ如シ其一班ヲモ得ル能ハサルノ憾アリ之レ其人ノ爲メ又地方ノ爲メ甚遺憾トスル所ナリ依テ今仮リニ明治廿五年八月一日東田川郡清川村ヨリ杖ヲ曳キ南行シテ月山ノ頂キニ登リ更ニ西行シテ西田川郡鶴岡ヲ經同郡湯ノ濱温泉ニ遊ヒ再ヒ歩ヲ北方ニ

緒言

轉シテ飽海郡酒田港ヲ經鳥海山ニ登リ同郡松嶺町ヲ過キテ再ヒ東田川郡清川村ニ歸來スル遊歷順路ヲ定メ其間見聞スル所ノ實況ヲ錄シ加ルニ地圖及名所ノ眞景ヲ挿ミ以テ自今遊歷者ノ指南トセント欲ス江湖諸君本書ヲ以テ遊歷ノ便ニ供スルアラハ編者ノ素志又空シカラザルナリ是本書編纂ノ要旨ナリ

明治廿六年五月一日

編者誌

目次

莊內案內記目標

	丁數
清川村	二
出羽神社	七
月山神社	十
湯殿山神社	十二
金峯神社	二十
田川温泉	二十四
鶴岡町	二十五
大山町	二十九
加茂港	三十一
湯の濱温泉	三十三
温海温泉	三十五
善寶寺	三十八
酒田港	四十
鳥海山	四十三
湯の田温泉	四十五
松嶺町	四十七
莊內風俗一班	四十九

[illegible]

[illegible]

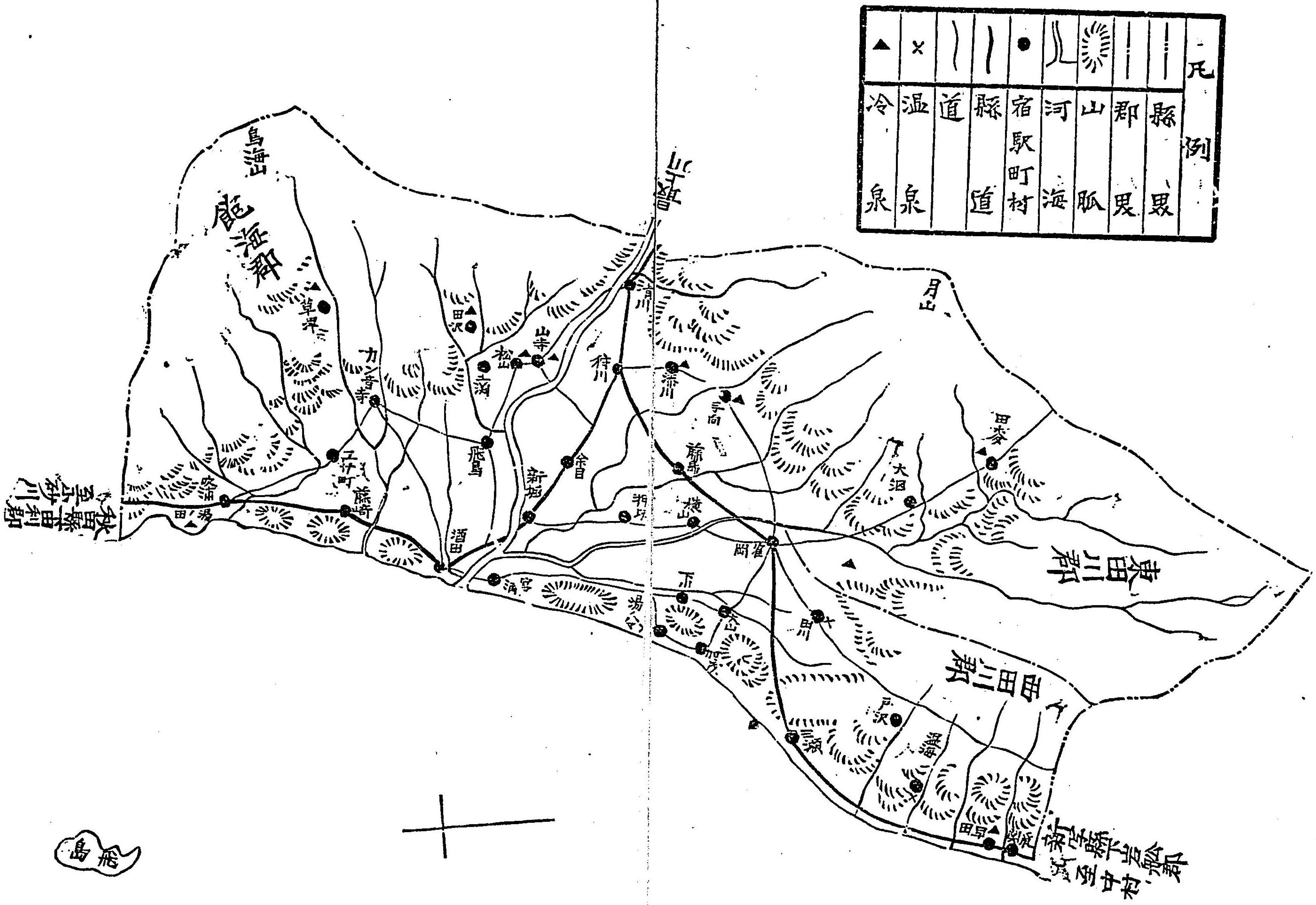
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]



凡例
縣界
郡界
山脈
河海
宿駅町村
縣道
道
温泉
冷泉
飽海郡
鳥海山
東田川郡
西田川郡
月山
飛島
酒田
清川
狩川
松山
山寺
新堀
藤島
大山

余庄内の地を一巡せんと欲し明治廿五年八月一日最上郡元合海村を發し最上川に沿ひ西北に向て行く五里余にして庄内の入口なる清川村に至る該村は最上川の西岸に位し村入口に立谷澤川なり架するに長き橋を以てす(長さ百貳拾間)之れを東雲橋と稱し維新前此所道路通せす莊内に來る人は最上郡清水村より船を以て最上川を下り清川村に達し又莊内を出るの人は該村より船に乘り清水村に至りしも明治十年故三島通庸氏山形縣令たりしとき此道を開き又橋を架したりと云ふ立谷澤川の南岸に圓くして高き草山あり之れを腹巻岩と稱し明治元年戊辰の役官軍此山に據て莊内藩の守兵と川を隔てゝ戰鬪せしと云ふ橋を過ぐれば道の右方に森々たる杉林あり之を御殿林と云ふ莊内の守兵此林に在て官軍に抗せしと云へり之れ戊辰の役莊内の國境に於て戰鬪の始めなりと云ふ此所腹巻岩を距る凡百間余森林の西方に一大

清川八郎の碑

石碑あり之れ有名なる清川八郎氏の碑にして近來有志の建る所也其文は氏生前交り親しかりし故山岡鉄太郎氏自ら撰て自から書せりと云ふ其位置高く四周に柵欄を繞らし花木數株を植ゆ又東雲橋より立谷澤川を遡ると凡百間余にして東田川郡の半面を潤ふす北楯大堰の揚け場あり該堰は昔最上出羽守義光の臣北楯大學守狩川の館に在りて數十年の辛若を經て堀鑿したるものありと云ふ夫れより西方に距ると

官軍の墳墓

貳拾間余にして戊辰の役此地に於て戰死したる官軍長州の藩士松本茂太郎及内田百合熊の墳墓あり該地は山脚を平げ高さ尺余の墓碑を立てり余一拜往時を回想すれは慘然として涙降ると數行夫れより清川村に入る

清川村

該村は戸數二百戸許り古來驛場にして旅店軒を並べ旅客輻湊し又最上川通船の寄漕場にして洋風に造りたる學校村役場及巡査駐在所もありて殆と小市街の如し旅店は多く二階造にして且つ廣り凡百人内外の旅客を宿泊せしむる孜得るものゝ如し其中最も

名あるは矢口某渡邊某鷹田某等にして余矢口某方に憩はんと店前に至れは下婢出て只余と唱へて一禮す(只余とは莊内にて面會の前に稱へる言なり)余の鞋を解き湯を持來りて足を洗ひ階上の一室に誘ひ暫くして主婦茶を持來り余を懇切慇懃し其体質朴にして邪氣なく客に對し殆と故舊を見る如く其接遇に老熟する篤ぶ驚くべきなり其中晝飯を持來る膳部數品を供ふ甚た丁寧なり食了りて該家を發し西北に向ふ

御所神社

て行く村を距る西方三丁余の山頂に御所神社あり峻坂にして漸く山登るを得たり社地は森々として風致幽凄社殿は壯嚴にして古色を存し寶に神靈の鎭座所の如し余一拜して後社地より北望すれば最上川遠く西北に走り鳥海山高く雲際に聳へ東田川郡及飽海郡は田圃指呼の中にあり該山を降りて再ひ清川村より尚西北に向て行く一里余にして狩川村に至る

狩川村

該村も戸數三百余戸警察分署あり村役場あり郵便局及學校等ありて清川に優るあるゝの如し該村より右行すれは飽海郡

白狐稲荷

手向村

酒田街道あり左行すれハ鶴岡及羽黒街道なり村外に出れは西方遙か數里の外に南より北に走る小山脉あり鳥海山は其北隅に峙ち其他一望眼に遮るものなし其間皆稲田にして村落の所に點在するを見るのみ廣大なる沃土實に驚くべきなり村外より行くと貳丁余にして鶴岡と羽黒山街道との追分あり左行すれは則ち羽黒山街道なり余此道を行くに左は一帶の山右は田圃なり行くと里余にして三ヶ澤村に至る該村に稲荷神社あり之れに祈願すれは其効驗著しと云ふ故に遠近の者參拜すると夥しく社地は信者の奉納する旗紅白林立し遠く之れを望めは恰も桃花の爛熳たるを見るが如し該村過き添川村に至る此所より坂路にして左右大樹繁り日光を見る能はさるあり行くと里余にして手向村に至る該村は羽黒山の麓に位し四周皆山最も幽邃の村落なり戸數三百余戸村民多く齋修驗者なりと云ふ故に玄關に神殿を構ふるもの多し村の中央に小溝ありこれに長さ貳間余の石橋を架し此橋

黄金堂

三山神社々務所

は一枚に小て石地に木目を顯はし實に奇石なり其左右の欄干は有名なる元羽黒山別當天佑か作にして稲妻形よ南無阿彌陀佛の數字を彫刻せり一見して其非凡なる作なるを認む夫れより行くと數歩道の中央に石の大華表ありて其左方に社殿數棟ありて現今甚た荒廢せり惜むべきなり其中黄金堂と稱するは源頼朝建立なりと云ふ其結構極めて精巧なるは數百年前の工作と想像せられる其前方に鍋釜なと作れるが徑六尺余釜の如き古器物を安置す之を俗に武藏坊辨慶の精鍋と稱するも其何の用に供しあるや詳かならすと云ふ時に午后六時を過くるを以て該村旅舍某方に投宿す [illegible]

八月二日午前三時に起き旅装して該家を出て羽黒山の登端に至れは左方に月山湯殿山羽黒山三山神社の社務所あり和風の構造にして位置高く眺望最も好し其前方に官幣中社月山神社國幣小社湯殿出羽神社の大標木を建てり夫れより山に登るに入口に端身門と云ふ大門あり此所を過くれは緑林

祓川

深くして甚た涼氣あり道路ハ切石を敷き坂路を上下すれと數回山河の混々として流るゝあり之れを祓川と云ふ蓋此川に於て參詣人不淨を拂ふとの意なるへし架するに木橋を以てす其欄干に載する所の擬寶珠に上杉景勝が重臣直江山城守兼續奉納とあり金色古佳にして數百年前の作ならんと認む夫れより又上下すると數回右方に廣漠たる平野あり此地維新前羽黒山別當の居館地なりと云ふ夫れより行くと數丁

五重塔

にして高塔の林間に屹立するものあり之を有名なる五重塔にして其精巧實に驚くへきなり其創立の年限詳に知る能はすと雖とも數百年前の作ならんと想像せらる夫れより總て上坂なり最も峻坂なるは俗に油こぼし坂と云ふ其長さ五六丁伏して漸く登る甚たしきに至りては直前に足を伸る能はす身を斜に取て登る該坂を過き更に登ると數丁左に奥まりたる一宇あり之れを化藏院と稱し結構甚た廣大なり維新前にありては常に數十の僧侶を置き最も盛んなりしと云ふも

現今大に廢頽したるの觀あり該寺位置高く庭前數十丈の谷あり谷間に草花を見又虫聲を聞く等清涼にして殆と人古を絶つの心地せり夫れより登ると五六丁にして

出羽神社

出羽神社の社殿あり廣大壯嚴にして其規摸實に驚くへきなり社頭に徑貳間余唐金製の鰐口なるもの掲く夫れに數條の綱を下け禮拜するもの該綱を取て鰐口を一打して拜するを例とすと雖とも余微力綱重くして打ち能はさるものゝ如し其左方に

蜂子神社

蜂子神社あり出羽神社の如く廣大ならすと雖も柱其他に精密なる彫刻を施したる精巧は却て優るかのゝ如くなり右方に

東照宮

東照宮の社殿あり之れ又廣大ならさるも金の葵紋を置きたる等甚た壯麗なり手向村より此所に至る里程壹里余殊に道峻しと雖とも切石を敷きて階段となす之れ皆信者の義捐に成るものあり社殿の建立道路の修築等實に幾十万圓を費したるや想像する能はさるなり以て其盛時を思ふへきなり夫れより東方に面して行くと貳拾町余坂路上下し巨石轉在左右森

森として日光と蔽ひ甚た凄然たり忽ちにして常火堂と稱する堂あり此堂は山籠の行者居る所にして古より晝夜火を焚き消すことなし故に其名ありと云ふ其前面に一の石造ある大華表あり之れも有名の天佑か作にして龍の上下する樣を彫刻せり夫れより貳丁余にして觀世音堂あり古壯麗なりしと雖とも現今甚た頽廢せり婦女子の此山に詣るもの此堂を拜せざるものなしと云ふ夫れより壹丁余にして街道坂と稱する所に至る此邊は小柴山にして西望すれば庄内の山水瞳中にあり東方は山嶽疊重山色甚た佳なり行くこと貳拾余丁にして茶店あり食物を販賣し行人此所に憩ふるを常とす此山中路傍に高さ七尺余の石を建るあり夫れに芭蕉翁の句を彫刻せり左の如し

涼しさやほの三か月の
羽黒山

夫れより拾余丁にして太満と称する所に至る此所に小月山神社の拝所あり此邊は胸道坂にして左右又森林なり行くこと拾余丁にして神子石と云ふ石あり古神子此所に至り石に化せりと云ひ傳ふ夫れより行くこと拾五六丁にして強清水と云ふ所に至る該所に憩小屋ありて酒類其他食物を販賣し其傍らに泉水ありて混々として盛夏と雖とも絶ることなく之れを飲めは冷かにして大喝頓に止む實に名水なり該所より又行くこと貳拾丁余にして狩籠と云ふ所に至る其左方に周回半里余の大池あり夫れより又拾五丁余にして天平清水と稱る憩小屋ありて夫れより行くこと貳拾余丁にて至れは合清水と稱る所あり手向村より此所まて駄馬漸く通るを得ると雖も之れより道嶮にして登る能はす俗に此道を御作の道と云ひ夫れより八丁余登れは祭の河原と云ふ所に至る此邊は茫々たる荒野にして樹木なし之れより行くこと拾三丁余にして御田原神社の拝所あり其傍らに憩小屋あり同しく食物を販賣す之れまて東

月山神社

北に一里余下れば東補陀落の拜所あり該所に禮拜して再び御田原の拜所に戻り更に行くこと貳拾丁余にして毒池と稱る池あり周回凡貳丁余其傍に同じく憩小屋ありて一膳やはらと稱る赤飯販賣す行人之れを食するを例とす夫れより拾丁余にして來名戸神社の拜所あり此所は懺悔の場と稱へて參拜する人從來の惡事抔懺悔し張然たる良心に立返り登山する所あり夫より拾六丁余にして大峯神社の拜所あり更に登る事拾丁余にして官幣中社月山神社の社殿に至る其構造方貳間余にして屋根は板を以て葺き用材は檜にして白木あり甚た質素にして彫刻及着色等施したるにあらす唯殿上に金の日月を掲く參拜する者之れに錢を投す其當れと當らさるを以依り將來の運命を卜することと云ふ社殿の左右高く石垣を築き風害を避く其內部に數多の末社あり之れを拜すれば禮拜全く了る則ち神門を經て社外に出れば此所に於る神札等抔授與す山頂より最上地方と望めば遠く山形縣廳師範學

山上宿泊小屋

校等の白壁は遙かに之れを認むるを得其高きと驚くへきあり之れより壹丁余下れは則ち參拜人の宿泊小屋あり小屋は長さ拾間巾三間三棟に分る屋根は薄を以て葺き周圍笹葉を以て囲ひ床下に笹を敷き其上に蓆を敷く壹小屋凡貳百人內外を宿泊せしむ該小屋に於て粗飯を調理し以て行人に與へ僅に飢を救ふ夜に至れは涼氣俄かに増し綿入壹枚を着し夜着を以て其上を蔽ふも尚寒きを感する程の如くあり同泊の行人腹背相接し身を縮めて漸く安眠するを得其辛苦思ふへきあり[illegible]

八月三日未明臥床を出て屋外に出れは濃霧にして咫尺を辨せす涼氣依然山下十月後の季候の如し再び屋に入り朝飯を食し膳部一汁一菜僅に飢を凌ぐのみ食後該小屋を出て下ること貳丁余鍛冶屋敷と稱る所に至る此所に稻荷神社あり傳へて云ふ此所は往古鍛工の住居したる地にして稻荷神社に祈願し月山丸と稱る名劔を鍛錬したる所と云ふ此所より更に下

ると弐拾丁余にして牛か首と稱る所に至れ此所にも前と同様ある宿泊小屋弐棟あり夫れより壹丁余下れは常世岐姫神社の拜所あり此所にて行人壹人に付金六厘妙加錢と稱へて受くるを例とす此所より八丁余の間湯殿山神社の水上あるを以て雨便其他脱唾を禁せり此所より八丁余下れは清き川と稱る小川あり川の傍に拂戸神社の拜所あり夫れより弐丁余下れは装束の場と稱る所なり此所より行路最も險悪なるを以て行人此所に於て服装を固くするを例とす此所に於て最上郡志津村の方より來る行人と逢ふ處あり該所より拾丁余の間は實に断崖の面を歩するが如き所なり鉄鎖を架せり該鎖に依りて漸く行く此所を下れは梵字川と稱る山川あり此川甚た急流にして川中巨石の轉在するあり行人該石を渉て向岸に達す又岸上に登るに長さ九尺余の鉄楷を架せり此楷を渉く漸く岸上に登る其危險實に身心を寒からしむ岸上に至れは道漸く平なり行くと拾丁余にして國幣小社湯殿神

社の拜所あり此拜所は別に社殿を設くるにあらす巨石累々たる所長さ九尺巾四尺余の凹所あり此所より靈泉混々として湧き出つ熱強くして觸るゝを得す之れを二拜して右方の祈禱所に至れば神官出てゝ神符を授與に又其傍ある小屋に至りて神酒料金弐錢一厘を納め神酒を賜ひて禮拜の式了る其裏面及左方には幾多の末社あり先達の者一々其神號を唱へて參拜せしむ此所より弐丁余坂路にして再ひ急に下る此所に長さ拾三間余の鉄階を架せり行人鉄階によりて下る下れば再び梵字川に出つ又巨石を渉りて向岸に達す是より始終梵字川を縫ふて行く其間數多の禮拜所あり仙人澤と稱る所に至れば亦長さ五間余の鉄階を架し此階を越へて壹丁余至れば長さ拾三間巾四五間の小屋二棟あり其構造皆笹を以て造れり常に湯殿山籠の行者在り又行人宿所に宛つるもの旅宿泊せしむと云ふ此所より上下して行くと弐拾丁余西村山郡より庄内に通する六十里街道に出つ此所へ憩ひ小屋あ

り行人に藥湯を飲ましむるを例とす此所より行くこと數丁にして梵字川に至る架するに丸木の壹本橋あり橋下數十間激流端々として泡を飛はし之れを望めは危險にして神心寒きを覺ゆ該橋を渡りて行くこと數丁笹小屋と稱する憩小屋二棟あり此所に於て食物を販賣し更に上下すること壹里余德行師水と稱する清水湧き出るあり此所にも憩ひ小屋あり冷麵其他の食物を販賣す其前に杉の大樹あり枝葉甚た繁りて古稀のものと認む夫れより下ること貳拾丁余にして象の神茶屋と云ふに至る此所より西望すれは東田川郡田麥村瞳下に見る其景甚た佳なり行くこと拾四五丁にして田麥俣村に至る該村は四面皆山戸數僅かに貳拾余戸村の中央に湯殿山より流れ來る梵字川あり其西岸に冷泉湧出つ其發見の年代及効能概ね左の如くにして常に數十人の浴客ありと云ふ

泉質　鹽類泉

無色透明にして反應は中性なり

炭酸　中量　格魯兒　最多量　硫酸
中量　珪酸　中量　那篤僧謨　最多量
加僧謨　中量　鉄　最多量　石灰
最多量　礬土　多量　麻倔涅矢亞　中量
比重　一〇二五
固形分合計　二三、五九五
温度　氣温　十九度　泉温　貳拾貳度
効能
慢性消化器諸病　僂麻質斯　痛風　綿病
貧血　氣管支加答兒　骨犬諸病　病后衰弱
子宮諸病
發見　文久三年

該村を過ぎ行くこと壹里余大網村に至る此所に大日坊と稱ふる大伽藍あり此坊古より三山參詣人を取扱ふ所にして維新前の如きは常に數拾名の僧侶を置き坊務を處理せしめ又參

注連寺并に鉄門上人の即身佛

拜人群集するときの如きは一夜千人内外を宿泊せしめ非常に盛なりしも維新後神佛の制明なりしより昔日の如くならす且つ維新後火災に罹り舊伽藍燒失し現今の建物は其後新築せしものなりと云ふも其内部の修理未た全く整頓したるにあらす時午後五時に近きも未た宿泊するに早きを以て更に勇を勵まし行くこと五六丁にして大網村の内注連寺村に至る此所戸數三拾余戸旅店某方に投宿す此所にも注連寺と稱する大伽藍あり維新前大日坊と同しく參詣人を取扱ひ甚た盛んなりしと云ふも明治廿一年火炎に罹り棟器高樓皆燒失して今新築中なり此寺に開基鉄門上人の即神佛あり小なる社殿に安置し身に緋の法衣を着し手に珠頭を持てり余之れを拜して宿所某方に歸り装を脱き浴に入り夜飯を食して後眠に就く此村山村なるを以て中宵涼氣あり且つ數日山路を跋渉して身体大に勞したるを以て直ちに快眠す

八月四日大網村を發し山路を登ること數丁にして山頂に至る

此所十王峠と云ふ遥に西北を望めは庄内の地悉く指呼の間に見る北方沖合に點在する飛嶋の如きも之れを望下するを得鶴岡の市街は西方直下にあり赤川は遥に北方に走り恰かも布を晒しか如く其風景の佳絶なる到底描筆の盡し能はさるものあり該所に茶店二軒あり皆酒類其他食物を販賣し暫く談茶店に憩ひ其風景を愛するに涼風頻りに至り炎熱の苦を忘るゝか如く知らす神心恍惚として眠る忽ちにして夢醒め該茶店を去て再ひ歩せり之れより漸次下坂なり道の左右木立森々として風なく炎熱燒くか如し唯た谷間に飛鳴する郭公の聲と虫聲とを聞くのみ行くこと壹里余にして東岩本村に至る此村戸數三十余戸赤川の東岸に位する一僻村なり村の外れに赤川の渡船場あり盛夏と雖水涸るゝことなく川巾貳百間余急流にして水底深く兩岸に綱を張り之れを繰て船を濟すり暫時にして西岸に達す此川二源あり一は湯殿山より發する所の梵字川にして一は是れよりか南方拾數里なる大鳥山の

湖水より發し上流二十丁余を距る落合と稱する所に於て兩川相合し更に大川となりて遠く北方に流れ拾數里にして最上川に注ぐ東西田川郡の田圃は多く此川水を引きて耕耘の料に供せりと云ふ該川を越れば熊出村の地方なり此邊地域東西は狹く南北に長く西方は金峯山母狄山鎧峯等の諸嶺堺列し北市三拾丁に過ぎず唯た南方は之れより八九里の所迄家田圃ありと云へり南極は山形縣西置賜郡新潟縣岩船郡と界すと云ふ大鳥村は此南方に於鑛山數ケ所ありて銅金及あんちもにい等を產出すると云ふ此所より北に向て往復僅は以て熊出村に至る路傍の茶店に憩ひ晝飯を食し是れより往はくる壹里余にして鶴岡道と金峯山道との追分あり余金峯山を拜せんとの志望なるを以て西方に向て行く貳拾余丁にして山麓なる瀧澤村に至る之れより山麓の小徑を行く壹里余に出で金峯山の麓なる青龍寺村に至る該村は戸數五十戸余村の中央を青龍寺川流る水清くして急流なり其兩岸に茶店

あり古より豆腐及笹卷を著名とす余該茶店に憩ひ豆腐汁を食し味淡くして尋常のものと異なり金峯山の登端に石の大華表あり此所を過ぎ行くこと數十間にして寺あり之れを青龍寺と稱し風幽棲にして避暑に適せり此邊より漸く坂路なり此山は月山湯殿山の如く高山といふにあらざるも林樹森々として凄氣あり且つ日光を蔽ひ幾分の暑氣を減するものゝ如し道路次第に險しく漸く樹根の地上を縫ふものに據て蹉跌を免かるゝを得此間路傍に不動堂其他數多の堂宇あり然れども屋根頽るゝ等頗る廢頽に屬するものゝ如し登ること壹里余にして金峯神社の社務所なる此所は地平にして其結構甚た廣壯なり聞くか如くは維新前此所に南都院と稱する寺なる該寺は一山の事務を總裁し其權勢殆と大網村大日坊と齊しきか如くなりしも維新後に至り神佛の區分明なりしより該寺を廢し其建物を以て社務所に充つるものなりと云ふ該所に少時休憩して暑を避く夫れより登ること壹丁余にして社

殿あり間口六間位奥行八間余屋根は萱葺にして柱梁に彫刻施したるにあらさるも自ら古色ありこれ維新前觀世音堂にして婦女子の此山に詣るもの此所に至り拜するを得と雖も此奥に登ることを禁せりと云ふ此所より登ること拾町余にして道の中央に仁王門の如き神門あり該神門を過くれは則ち金峯神社あり此邊は道路頗る險にして鐵鎖に依り漸く登るあり社殿は廣大なりと云ふにあらさるも柱は皆丸木にして屋根は廣金葺なり其結構頗る古佳なるものと認む社地森々として晝尚夜の如く甚た幽凄なり傳へ云ふ本社の創建は陸奥守藤原秀衡なりと云ふ又南北朝の時楠氏の子孫此地に落來りしと云ふ其引證すへきは本社第一の寶物は後醍醐帝の宸筆にして神號を記せられたるものありと云ふ又該山の麓に高坂村赤坂村と云ふあり其西方に糀山と稱る小山あり該山元河内山と稱へたるの轉化したるものありと傳ふ其他山中の峰澤の字名吉野山中の字名と同一なるもの多しと云へり

社殿の左方に一の堂宇あり是祈願者の山籠する所ありと云ふ此所より奥の院と稱る拜所まて凡七八丁余該所に至らんには此所より先導者を雇はされは行くこと能はすと云へり依て先導者壹名を雇ふ其雇賃四錢八厘あり此所に於て裝を固くして行く道路甚た嶮にして上下すること數回行くこと數丁にして道の中央に大さ小山の如くある巖あり其下部に自然に穿ちたる空洞あり此所身を縮めて漸く過くこれを母の胎内と稱ふ此所より六七丁にして(のぞき)權限と稱る拜所に至る則ちこれ奥の院なり巨岩の上に櫻樹壹と株生立しこれに身を寄せ伏して數十丈の深谷を拜する所あり若し誤て巨岩より轉落することあらは万死の中一生も免るゝ能はさるものゝ如しこれを思へは恐懼身に粟を生せり一拜して忽ち岩上を降る然れとも深谷の間奇樹珍石點在して實に異狀を爲せり是れより歸途に就く初め來る道にあらす他の經路を行く少時にして再ひ金峰神社の社地に出つ此所より左方三拾間余

行けは藤澤村に至る山道あり峻坂を降ると甚た急にして轉々壹里余藤澤村に至る該村は金峰神社の西方に當る山麓にして戸數三拾戸余の寒村なり該村より西方に二三丁行けは鶴岡より有名なる温泉塲田川村に達する街道に出つ該道路は平坦にして車行織る如く此所より拾丁余南行すれは則ち田川村なり該村は戸數百余戸商店あり旅舍あり貸座敷あり加ふるに浴客群集して甚た賑はし余該村の中最名ある旅舍今野某方に投し該家は二階造にして家屋廣大なりと雖も浴客多くして虚室なきか如し旅裝を脱して直ちに温泉に浴し泉質透明にして湯壺甚た廣く身を伸して游泳するを得浴後風涼くして終日の勞を忘るが如し少時憩ふて村内を巡見すれは該村の地勢たる東南に山を負ひ西北稍々開け殊に鶴岡より越後に通る山道の線に當り古田川舘のありし地なりと云へり西方の山に田川温泉神社あり結構壯嚴にして社地風致あり恰も神靈の在る所の如し該社地に生立する杏樹の如

きは根幹枝葉非常に繁り幾千年を經しものゝ如く實に稀有の名木なり一拜して堂を去り其奥にある岩清水に至る此所巨岩の間より清水混々として湧き出て盛夏と雖も其量減するをなし試に一杯すれは冷かにして齒に疼痛を感し實に名清水なり此所より壹里余南行すれは町田川村といふあり該村は往古源の義家奥州征討の際此地に軍を駐めしか故舊蹟多しといひ傳ふも余積日の勞苦此地に至らさりしは遺憾とする所なり一巡して旅舍に歸り晩食を終へて直ちに臥床に入る中宵近隣弦聲歌舞雜踏甚たしく眠る能はす深更に至り漸く眠るを得たり因にいふ該地は庄内地方最も古く娼妓のありし地にして今大山村(昔時尾浦と稱す)城主武藤義興越後の上杉景勝と戰ひ敗して敵城下に迫り矢炮乱發城樓將に焦土とならんとするの危機に迫り城下の婦女皆難を此地に避け後糊口に窮し終に淫猥の業を營みしといふ故に庄内地方に於て娼妓を(をバ)といふ尾婆といふの意ならん該温泉の發

見年限及び泉質効能等左の如し

一泉質　鹽類泉

無色透明にして反應は中性なり

硫化水素　極痕跡　格魯兒　少量　硫酸
多量　硅酸　少量　安謨尼亞　痕跡
那篤僧謨　多量　加僧謨　少量　鉄
痕跡　石灰　多量　礬土　痕跡
麻倔涅矢亞　痕跡

比重　一、〇〇二五

固形分合計　三、二八八

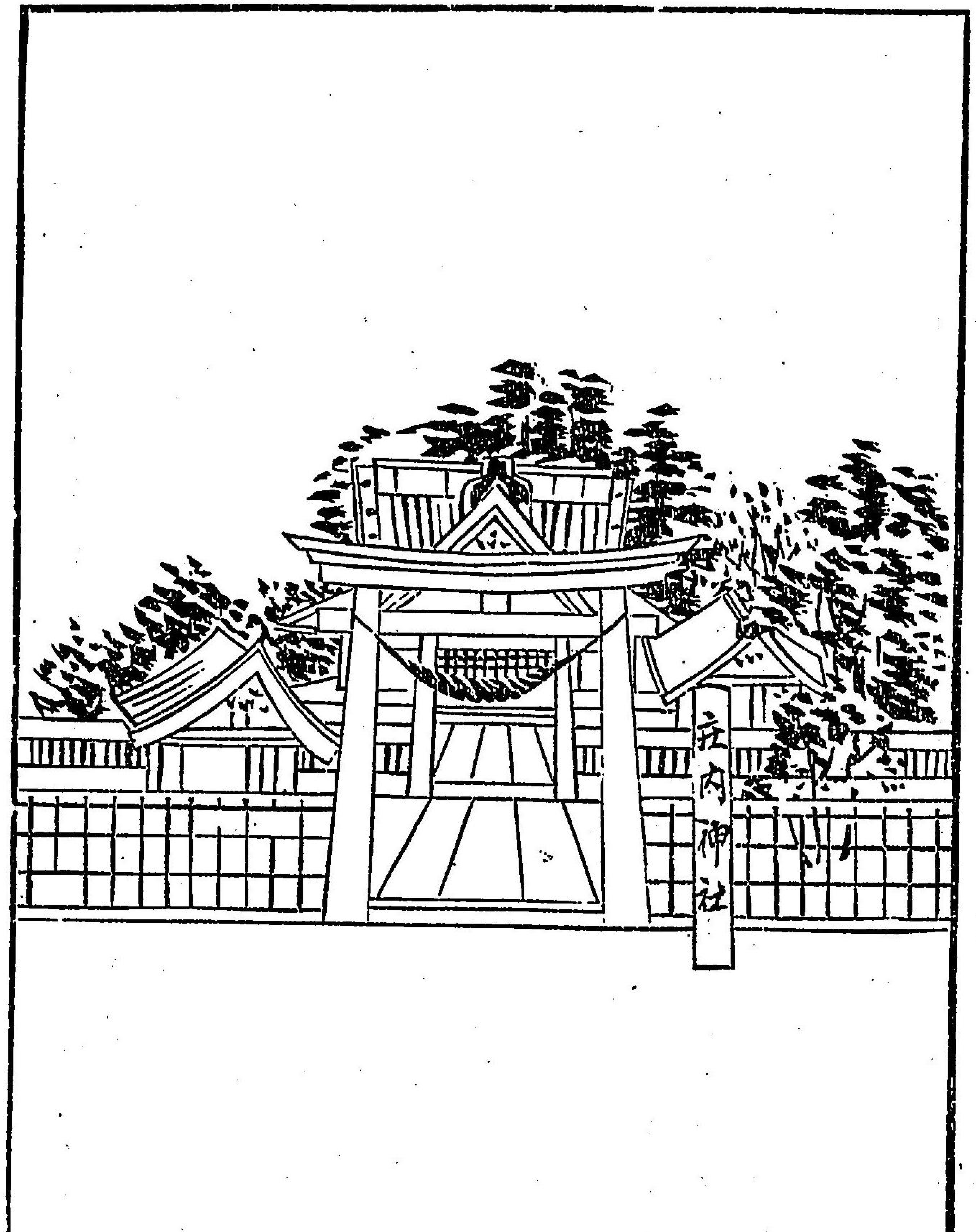
一温度　氣温　十七度　泉温　三十九度

一効能

慢性膓胃病　慢性僂麻質斯　痛風　瘰癧
萎黄病　子宮病　貧血　痔疾　慢性皮膚病
疥癬　黴毒　癩病　常習便泌　全身多血症

一發見和銅五年

八月五日早起浴に入り飯後該村を發して鶴岡に向て行く道路平坦にして東南山を負ひ西北は田圃遠く開け行くこと拾丁余にして道の西方に恰も摺鉢を伏したる如き山ありこれを森の山と稱へ佛山にして舊暦盆に至れは參詣する人甚た多しと云ふ又道の右方に土色朱の如き小山ありこれ則ち糀山なり此土は植木に特効ありと云へり忽ちにして鶴岡に至る入口を番田村と云ふ然れとも其体裁町家と異あるなし行くこと二三丁にして道の中央を横断する大河ありこれ金峯山の麓を經て流來る青龍寺川なり橋を架せり此橋を稲生橋と稱し又行くこと四五丁にして鍛冶町と云ふ所に至る此所に巡査の交番所あり其前より右折して行くこと三丁余七日町と稱る所に至る該町は多く貸座敷にして弦聲戸々に洩る旅舍伊勢屋某方に投し該家は廣大にして鶴岡旅舍中最も客多く常に三四拾名を宿泊せしむと云ふ該家に使役せらるゝ男女凡七



隺岡公園地内

入名客に對する甚た素朴の如くなるも其中又練熟する所なり時正に午時に近し然れとも本日は當所に滯在して市街を巡見せんとする志望あるを以て旅裝を脱して後晝飯を食し食後該家の丁稚某を案内せしめて市街を巡見し市街は東西に狹く南北に長く戶數凡四千余戶ありと云ふ町の中央に南より北に流るゝ川あり之を內川と稱し水底深きにあらさるも小船を通するを得故に貨物の運輸皆此川に依るものゝ如くにして甚た便利なり川の西方は元郭內にして川の東方は町家あり町中最も賑はひなるは七日町一日市町十日町三日町下肴町荒町等なり道巾廣くして商家軒を並へ七日町は貸座敷一日市町は多く呉服店其他の町は呉服小間物等皆混一の商店あり其他八間町と云ふ所にも貸座敷あり內川に架するに五橋あり其中下肴町より荒町ゑ至る橋を大泉橋といひ三つ眼鏡の石橋にして甚た美麗なり東北より鶴岡に入る所を大寶寺村と稱へ道の兩側に老松數百株を並植へたり故に

此所一名松平と稱すといふ其東方は赤川の大川を繞らし架するに三橋あり縣下有名の三川橋之なり維新前此所渡船場なりしも故三島通庸氏鶴岡縣令たりしとき架橋したりといふ其中長きは百間余あり舊郭内は家屋大に頽れ舊觀を失ふものゝ如し舊城内は今公園地にして其中央に舊荘内藩主酒井氏の靈を祭る社殿あり之れを庄内神社と稱し社殿新規に屬すと雖も結構精工にして甚た壮嚴なり其東方に大なる蓮池あり紅白の花池上を蔽ひ甚た麗はし公園地の東北方距ると數十間にして朝暘學校と稱へる小學校あり鶴岡全市の子弟皆此校に入ると云ふ結構和風なり其東北方に舊藩の學校あり今朝暘學校の分校に屬せり構内樹木繁り甚た風致あり其東北道を隔て裁判所あり同しく和風の結構なり其東隣に警察署あり結構洋風にして高く峙ち甚た壮嚴なり又其東隣に西田川郡役所及郡會議事堂あり何れも洋風にして壮觀なり其北方後面に神宮教會所あり又其向道を隔て基督教講義

所あり佛國人某あり宣教すると云ふ公園地の西方に舊藩主の邸宅あり家屋邸内甚だ廣く之れ故藩主の老公居住せられたる所ありといふ又其西北方に庄内中學校あり結構和風にして廣し之れ亦舊藩主奥方の居住せられたる建物なりと云ふ其他商店にて最も盛なるは書籍小間物藥品等を販賣する五日町惠比壽屋某藥種小間物店に於て一日市町熊本屋某と認む店頭客常に充滿し番頭數十人趨走安座するとなし次に旅店にて盛んなるは七日町伊勢屋某三日町粂子某下肴町田林某等あり又料理店にて盛なるは荒町東方にある旭樓及上肴町常盤樓等あり旭樓は赤川の流を臨み遠く月山羽黒山等の諸嶺を望む風景廣くして筆紙に盡し能はさる好景あり常盤樓は金峯山其他の靈山を前庭に見るか如く之れ又甚だ佳なり其他市場は三日町に魚市あり毎朝庄内西方沿海の村落に於て捕獲する魚を持來り販賣すると云ふ多くは小鯛鰈金頭其他種々の魚介等也何れも鮮魚にして鱗に金色を帶へり

又三日町十日町に青物市場あり道傍に日蔽を掲け種々の菓物野菜の類山の如くに積て販賣せり又鶴岡の西端萬年橋と稱る河岸に廣大なる製糸場あり近年の構造にして新規なり器械は總て蒸滊仕掛けを以て運轉し常に數十名の工女を役し聲望頗る好しとす此所より北方に五丁余距る新屋敷と云ふ町あり此所に監獄署あり結構和洋相半はし甚た壯觀なり諸方を歴巡すれは殆と點燈の時に至る驚きて旅宿に歸り晩食を食し中宵各妓樓に燈籠を掲け又門前のらんぷに點火して恰も白晝の如く其他水茶屋の如きは數百の球燈を掲く遊客は道路織る如く弦聲樓外に洩れ雜踏眠る能はす深更に至り漸く人靜まり眠るを得

大山町

八月六日早起朝飯を食し旅裝して該家を發し道を西方海岸に取る道平にして恰も砥の如く行くと殆と貳里にして大山町に至る町の入口に大山川流れ最も通船の便あるものゝ如し此地は古武藤氏の居城ありし所現今戸數七百余戸にして

殷賑の地なり就中本町及荒町の如きは其体裁鶴岡にも劣らさるものゝ如く料理店なり貸座敷あり其他の商店軒を並へ繁華鶴岡に亞く而して此地古より酒の名所にして酒造家最も多く其の多く醸造する家は數千石を醸造すると云ふ該町の西方距ると貳三丁にして太平山と稱る小山なり此山に古城郭ありしと云ふ今桃櫻其他の花樹數百を植ゆ其左右に大なる池沼二つあり春分鴨鴈多く飛ひ來りて花時の景最も佳なりと云ふ其西方に高館山と稱る山あり諸嶺に秀てゝ屹立し山上ゟ西望すれば飽海郡の沖合飛嶋及新潟縣に属す所の青島等眼下に見るを得此山ふも古館のありし地にして今尚其堤を存するといふ太平山を降りて西行するに加茂山の一派横へり此山を越ゆれば西海岸加茂町に至る古は坂路にして甚た険なり僅に駄馬を通するを得ると雖も維新後道路を開修し現今車馬馳驅するを得山腹に長さ貳百間余の隧道あり其前面に茶店二戸ありて酒其他の食物を販賣し此所より

加茂山の隧道

加茂町

加茂港

東鶴岡地方を望めは鶴岡町は勿論諸山田圃一望の中に併せ見るを得其光景最も佳也暫く該茶店に憩ひ後隧道に入る中間暗黒にして咫尺を辨せず前方より入來るあれば僅に其響を聞きて互に衝突を避くるが如き甚た危險也該隧道を過ぎ下坂すると拾余丁加茂町に至る該町は戸數三百余戸大山町に比すれは規模狹く幾分劣るものゝ如くなるも港灣を有するを以て船舶の往來繁く殷賑却て大山町に優る該町にも貸座敷料理店及旅籠屋等あり時恰も正午なるを以て海邊の旅店某方に憩ひ午饗を食し膳部魚類にして且つ新鮮なり該家より望めは加茂港は斜に西方にあり港內滊船一艘あり此船は三吉丸と稱へ新潟港と酒田港の間を往復するものにして當港より船客を乘するか爲め寄航せしといふ其他和船は數拾艘輻湊して恰も秋落葉の池上よ浮ふか如くなり海邊は総て岩石多く其中巨大なるは小山を築くか如きものゝ多し故に波浪最も荒し西方七八町を隔て高く海邊に突出せし山あり

此山を唐船場と稱へ維新前此山に於て洋船の通航を警戒せしと云ふ今山頂に標木を建て之れに暴風の信號票を掲けて通船の便に供すると云ふ食後少時休憩して海邊を北に向て行く道路は近年開修したるものにして車馬馳驅するを得行くこと三丁余にして小山の如くなる巖を穿ちたる隧道あり長さ弐拾間余此所より弐拾丁余にして湯の濱村に至る此地有名の温泉場にして戸數弐百余戸東方に山を負ひ西方海に面し家屋多く海邊に向て建ち温泉二ヶ所あり西南方にあるを上の湯と云ひ北方にあるを下の湯と稱す浴室は廣くして湯壺を三ヶに分け其周囲に石を敷き上部に氣抜の窓を穿ち屋根は瓦にして近來頗る改良を加へたりと云ふ又温泉宿より浴室まて廊を架して浴客の便に供す温泉宿は何れも層樓にして結構廣大なり現今浴客數千人の多きに至り各宿虚室なしと云ふ余大に之れに苦み漸くにして某方より投し此地より北方の海邊は白砂にして岩石なし上の浴室の前に湯殿權現の

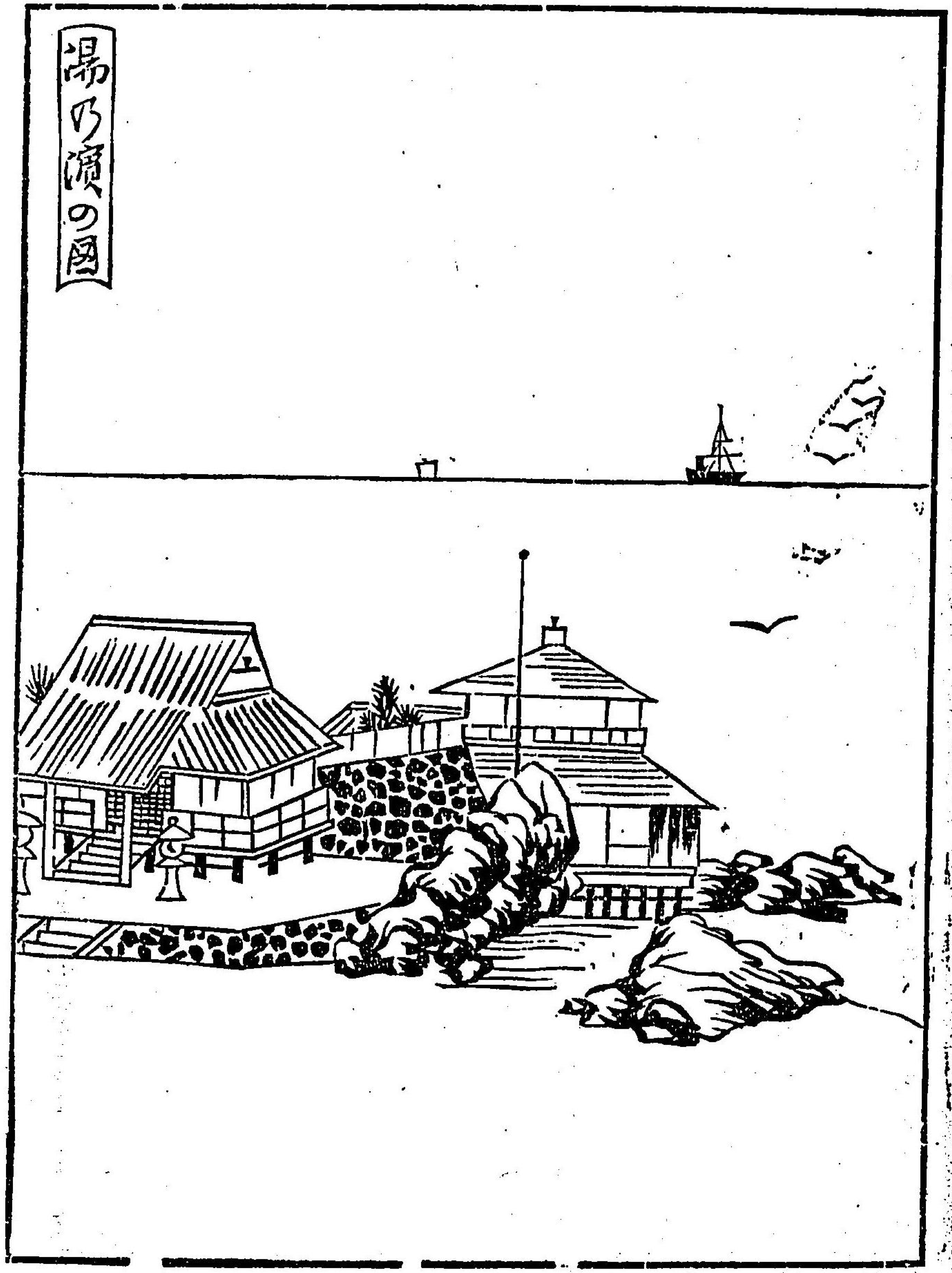
堂あり堂宇大ならさるも數百年鹽風に晒されたるを以て柱梁に付したる金屬は皆靑錆を生し頗る佳色あり其西面海邊に突出したる巖あり其上に高屋を設く之れ當地有名の料店某樓にして遊客常に絕ゆるなし一朝風荒く浪高き時は床下に波の寄すること往々ありと其左右の海邊は少しく灣形をなす之れ海水浴場なり數百の男女海水に浴し泳くあり唄ふあり其販賣に名狀すへからす其他貸座敷料理店等ありて甚た盛んなり夜に至れは東山より凉風海邊に向て吹き殆と暑氣を忘るゝ如し又蚊張を用ゆるなし且つ沖合には數百の漁船かゞり火々點して船々漕く様恰も螢の群るが如く其光景拙筆の能く盡し能はざるものあり

此地温泉々質効能等左に掲く

無色透明にして反應弱亞爾加里性あり

炭酸	痕跡
格魯兒	最多量
硫酸	中量
硅酸	少量
燐酸	痕跡

那篤僧謨　多量　加僧謨　多量　沃度
痕跡　鉄　少量　石灰　多量
礬土　少量　痲倔涅矢亜　少量
比重　一、〇〇五〇
固形分合計　四、七〇八二五
一温度　氣温　十六度　泉温　四拾三度
一効能
肝臓病　腺病　子宮諸病　貧血　急性及
慢性僂麻質斯・痛風　慢性皮膚病　下腹充血
全身多血　肝臓腫大　喉頭慢性加答児　氣管支
加答児　肺痨の初期　慢性腸胃加答児　消化不
良　胃潰瘍　胃擴張　常習便泌　痔疾
骨諸病　脊髄諸疾　病後恢復期
一發見天喜元年
此所より海岸を西行すれは三里余にして油戸村と稱る一村



落あり此所に石炭鑛あり維新後の發見にして其質純良産出高最も多く現今數百の鑛夫を役して堀出するといふ又之れより壹里余にして三瀬村と稱る村あり鶴岡より越後に通る海岸の通路に當り驛場にして賑ひありと又該村より海邊四里余にして温海村に至る該村より拾町余山際に入りて温海と稱る温泉場あり戸數百戸位多く温泉宿あり該湯は庄内地方最も古くより名ある温泉にして浴客の多き湯の濱温泉の客數と優劣なきものゝ由甚た殷賑の地なりと今該温泉の質及效能等聞知せしを以て左に掲く余余暇なくして此好地に行かさるを遺憾とす

一泉質　硫黄泉

微濁にして反應は弱亞爾加里性なり

硫化水素　多量　挌魯兒　多量　硫酸
中量　硅酸　少量　安謨尼亞　痕跡
那篤留謨　多量　加留謨　中量　鉄

少量　石灰　多量　礬土　少量
麻偪涅矢亞　少量
比重　一、〇〇二五
固形分拆合計　三、一二五
一温度　氣温五度　泉温五拾八度
一効能
慢性腸胃加答兒　胃潰瘍　胃病の初期　胃擴張
肝臓諸病　下腹充血　麻疾　尿石　痛風
疥癬　白癬　禿瘡　髭瘡　癜風
濕疹　乾癬　挫瘡　慢性潰瘍　膿疹
慢性丹毒　癩病　黴毒　鉛水銀等慢性の中毒
咽喉慢性加答兒　氣管支加答兒　腺病　中風
肺癆の初期　痔疾　腹腔及胸膣內滲出物
慢性腹膜炎　骨系諸病　子宮諸病　病後恢復期
常習便泌

一發見　嘉祿二年

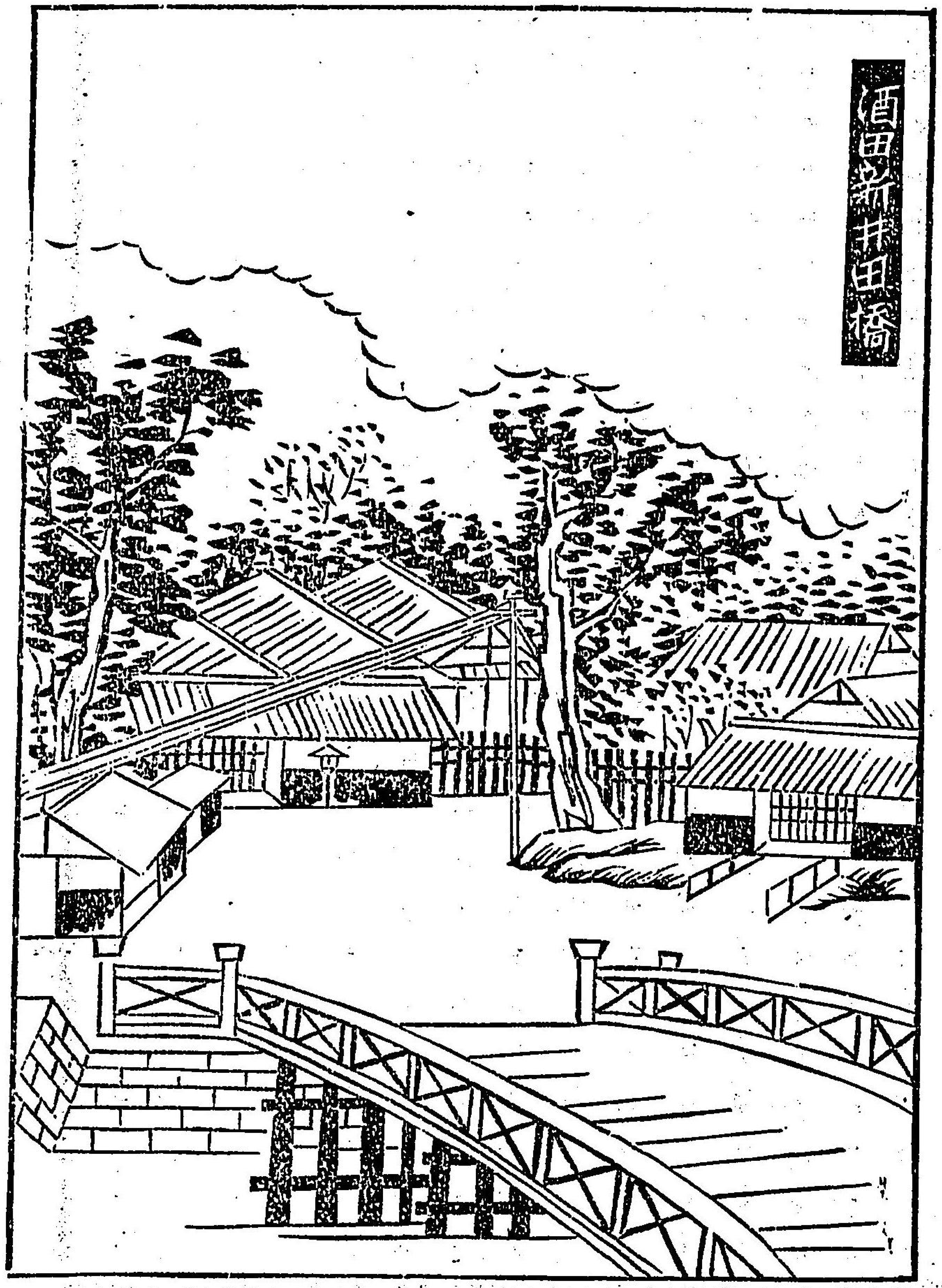
八月七日早起浴に入り直ちに海邊を逍遥し鹽氣濃にして身心大に快を覺ゆ遥に沖合を望めは昨外の漁船漕き來るもの數艘あり忽ちにして岸に達し其船を見るに釣具を携ふるあり又網を持するあり思々の漁具を携へ獲する所の魚は皆船底に收む漸く船底を開けは小鯛鰈金頭鱉其他種々の魚介を出すと夥しく其中生けるもの甚た多し魚鱗に金色を帶ひ其樣の愉快なる例るにものあし余小鯛貳尾を買ふ價甚た廉なり之れを携へて旅宿に歸り朝飯に食せんとして其調理を托す少時にして朝飯持來る該小鯛は鹽燒にして膳にあり之れを食すれは美味實に舌を皷して食す食後旅裝して該村を發し東北方に向て行く道砂山にして勾配あり一歩を進めは一歩を退くが如く行路甚た遲々八九丁にして山頂に至る流汗甚しく依て此所に憩ひ西北を望めは蒼海滿々として白帆の浮泳するあり其沿岸は白砂翠松數十里に渉り濱中村其間にあ

り北方は遠く鳥海山白雪を頂きて松林の中より半峯を顯し其光景殆と比すへきの地なし少時にして流汗漸く止む此所より漸次下坂にして下ると拾町余山麓に至る此所に茶店あり冷麵及酒類等を販賣し其西南方に有名なる巨刹善寶寺あり余該寺を拜せんと欲し行くと貳丁余該寺門に至る境內廣大にして林揃繁く門內より石段を登ると貳丁余山門あり五重塔あり其他數多の堂宇ありて各佛像を安置せり依て各堂を巡拜す該堂宇は何れも細微なる人類鳥獸類等の彫刻を施したるものにして其精工實に眼を驚かすものなり漸く本寺に至る其結構廣壯にして僧侶數十人堂中を徘徊し奥羽の地多く見さる巨刹なり一拜して再ひ石段を下りて先の山麓に歸る夫れより山に沿ふて北行し所々泉水の湧出るあり之れを飮めは冷かにして流汗頓に止む行くと里余にして濱中街道坂下に至る此所に茶店數戸あり皆酒類食物等を販賣し其傍に泉水の混々として湧き出るあり少時該茶店に憩ふ忽ち

にして濱中村の婦女魚類を竹籠に入れ之れを負ふて馳せ來るもの數十人余店主に其行く所を問ふ店主答るに之れ昨夜獲する所の魚にして之れより貳里余なる鶴岡の市に至り販賣するか爲め各先せんとして驅くる所なりと云ふ余之れを聞き其健康に驚く之れより酒田に至るに道砂山にして勾配緩なり此山皆松樹と桃樹のみ故に花時の風景甚た美なりと云ふ行くと壹里余にして廣岡村へ至る其前面に大なる池沼あり該村を通くれは松樹森々として四方見ると能はす唯た樹上に蟬聲を聞くのみ黑森村坂の邊村を通く坂の部村の東方赤川を隔て廣漠たる田圃あり之れを東田川郡廣野村と云ふ此所往古出羽府のありたる地なりと云ふ該府は嘉祥年中の大洪水にて氾水に遭ひ後池沼と變し又漸く谷地となり今より貳百年前再ひ村落を爲せりと云ふ夫れより行くと壹里余にして袖浦村に至る擧村漁業を以て生活し該村西北は海にして東は最上川の海に注く所此所を銚子口と云ふ川巾廣く

水勢甚た急なり船を雇ふて此川を渡り東岸飽海郡酒田町に至る同町傳馬町旅舎某に宿る時午後五時過きなり

八月八日早起朝飯を食し忽ち聞く氣笛の聲あり之れを宿の主人に問ふ主人曰く之れ當港と新潟港の間を往復する滊船三吉丸余當港を抜錨すれ所なりと云ふ之れ則ち一昨六日加茂港に於て見れ所の滊船なり飯後市街を巡見し當市は南北に長く東西に短く戸數四千余戸西は海に望み南は最上川を繞らし運輸甚た便あり市區恰も碁盤の面を見る如く東西南北に通り規模整然たり市街の最も繁華なるは本町通にして該町には郡役所警察署郡會議事堂あり皆洋風にして壯觀あり又該町の西端に琢成學校と稱する小學校あり當港全市の子弟皆此校に於て修學すると云ふ故に甚た廣く結構壯嚴あり舊城は市の南端にあり城樓は壞て其跡を止めす唯た周囲堤上に植る所の樹木僅かに存するのみ中ば園圃にして桑揃を植ゆ又市の北方に小山あり之れを山王山と稱し滿山皆松


酒田新井田橋

樹あり山中に日枝神社あり社殿廣大にして最も壯嚴なり柱梁には細密なる彫刻を施し結構極めて精巧なり社地風致ありて恰も神靈の在る所の如く山上より東南を望めは全市其山脚に連り遠く最上川を望む西望すれば高野の濱人家を隔て蒼海の茫々たる見る風光甚た好し市内貸坐敷ある地は今町及高野の濱なり層樓軒を並へ甚た殷賑なり又料理店にして最も壯大なるものハ柳小路にある小幡樓なりといふ該樓は位置高く巍々として峙ち樓上より望めは西南田川飽海兩郡の山水一望の間にあり實に千里一望といふへし夫れより少しく西方に至れば日和山と稱る小山海邊に屹立し此地甚た景色に富み遊客陸續として絕ゆることなし蕉翁の句を石に刻するものあり

温海山吹浦かあてゆふ涼み

温海山は西田川郡の西隅に聳ゆる高山にして此地を距る殆と十五六里吹浦は本郡の北境にして去ること五里余此句を以て

蕨岡村

鳥海登山

するも其眺望の絶佳なるを証するに足る時殆と十時に至る驚て旅舎に帰り晝飯を食し旅装して東方に向て去る行くこと四里余にして鳥海山の麓なる蕨岡村に至る該村は戸數凡三拾余戸村民多く舊修驗者なりといふ旅舎某方に投宿し明日は鳥海登山の見込なるを以て宵より眠に就く

八月九日午前二時に起き飯を食し旅装して該家を發し登山の同行者數十人なり行くこと壹里余字駒止めといふ所に至る蕨岡村より此所まて馬通るを得ると雖も是れより登る能はす依て此名ありといふ此所より行くこと更に弐里余道の中央に仁王門の如き神門あり此門を横堂といふ老弱山上に至る能はざるものは門の右側より谷に降ること拾余丁御澤といふ所に至り禮拜するを例とす此所に大瀑布ありて甚た霊地なり余等山頂に至るを以て横堂を直行す道漸く嶮なり其中壹里余の所松樹鬱茂して他を見る能はす路傍拜所多しと雖も社殿あるにあらす奇石洞嘯を拜するなく行くこと弐里余にし

鳥海山頂

て八丁坂と稱る所に至る此所より又弐里余にして河原宿と云ふ所に至る此所に憩小屋あり食物を販賣し且つ山中宿所に究する行人を宿泊せしむ此所より上ること壹里余の間雪路なり千古消ることなく皚々として恰も巖の如く故に甚た寒冷にして肌を裂くか如し滿山岩石を以て積みたる如く所々小柴あるのみにして大樹を見ず弐里余にして(わたみ)坂と稱る所に至る此所より道路最嶮惡なり誤て蹉躓するあらば千尋の谷に轉落すること必せり行歩甚た危險なり且つ空氣稀薄にして呼吸苦しく殆と氣息絶んとすることあり然れとも勇を皷して進みて行くこと壹里余にして山頂に達し此日幸天氣晴朗にして雲散し山頂より四望すれは南庄内の地方より東南仙臺の地方北秋田の地方に至るまて眼力の及ふ限り悉く瞰下するを得又西方飛嶋の如きは殆と山脚に連るものゝ如く其高きこと實に驚くへきなり此所より北方矢島に越ゆる道あり之れより轉して新山といふ所に至る此所は本山中最も高くし

大物忌神社

鳥海湖水

吹浦村大物忌神社の拝所

て古噴火の際新み吹出したる所ありといふ巨岩(徑十間位のもの)累々吹出し恰も籠の如く誠に巨石を山下に投すれは混々として轉落するを幾拾丁なりや知るへからす該所より少しく下れは則大物忌神社あり方五六尺構造甚た質素なり風害を避るか爲め周囲に石を積めり禮拝して更に下ること貳里余鳥海の湖水に至る此湖周囲壹里余水清くして且つ深し常に清波を漂はし恰も龍蛇の飛躍せんとするもの丶如く岸上に至れは神心凄然たり湖邊より一脉の峯を越れは鳥海の憩小屋あり該小屋も河原宿の小屋と同しく行人を宿泊せしむ此所より下坂なり然れとも行歩却て上坂より危険を感するもの丶如し午後六時漸くにして鳥海山の、西麓吹浦村に達す該村より北方に三四町距りて大物忌神社の拝所あり社殿は丘陵にあり石段を登ること數拾間社前に至れは壯厳にして社地老樹繁り森々として甚風致あり傳へ聞く西京加茂の社と風致甚相似たるものありといふ其夜該村へ泊せんとす

湯の田

湯の田の湯

るに里人いふされより北方に半里小山脉を隔てゝ海邊に湯の田と稱る温泉場あり該處に至るへしといふ里人の言に從ひ更に該所に至る此所は秋田縣の界にして戸數貳拾余戸温泉宿を以て料理店を兼る如き家五六戸あり家屋は何れも壯大にして二階造なり余某方に投宿し直ちに旅装を脱して浴に入る食後終日の山行甚疲勞するを以て直ちに眠に就く枕頭濤聲夢思を脳ます此地温泉性質効能等左の如く也といふ

一泉質　炭酸泉

無色透明にして反應は酸性なり

炭　酸　最多量　亜酸化鉄　痕跡　格魯兒
最多量　硫　酸　多量　硅　酸　少量
燐　酸　少量　安謨居亜　中量　那篤偘謨
一最多量　加偘謨　多量　鉄　多量　石灰
一少　量　礬土　中量　麻偘涅矢亜　多量

比重　一、〇一〇〇

固形分合計　一三、四七三

一温　度　氣温　十五度　泉温　貳拾九度

一効能

慢性腸胃加答兒　下腹充血　慢性咽喉加答兒及氣管支加答兒

慢性肺炎　胸膜及腹膜内滲出物　取道膀胱及腎孟の加答兒

腎石　膀胱結石　結取病　痛風　腺病

慢性胃潰瘍　常習便泌　肝臟病　脾臟腫脹　肥胖病

一子宮諸病　骨系諸病　乳腺病　貧血諸病　痔疾

萎黄病　白血病　壞血病　恢復季の遲慢なるもの

依卜昆垤里　歇斯的里　一般神經病　肺勞の初期　黴毒

疥癬

一發見文化元年

八月十日早起朝飯を食し膳部總て鮮魚味甚た美なり食後該家を發し海邊を眺望すれに此所又岩石ありて波浪激し魚介の類最も多く其安穏なる實に驚くへきなり該村の西方に一

孤島あり之れ飛島と云ふ此島當所を去る拾里余にして周回壹里余擧村漁業を以て生活を營むと云ふ夫れより道を西方に取れ吹浦村より以西小山の松原を行く西田川郡湯の濱より袖の浦村に至れ道路と相同し松樹は皆能登松あり聞く所に依れハ元庄内藩風砂の害を防かんか爲め西方海邊の山に能登より松種を持來り非常の辛苦を經く培養したるものなりと云ふ爾來此邊の田圃風砂の害を免れたりと云ふ其用意實に感歎すへきあり行くと五里余にして酒田町に着し某家に於て晝飯を食し食後再ひ該所を發し道を東南方に取り行くと貳里余ふして飛鳥村に至る戸數百余戸最上川の沿岸にして諸商店等あり其体町家に和類するものあり此所より行くと貳里余にしる松嶺町に至る該町は東北に山を負ひ西南開け最上川を距ると五六町ゐ過ぎす此所は元庄内藩の支封ある松嶺藩の城市なり居城は壞て園圃に變し唯た中門の樓を存しく漢學學校を設く其東方に藩主の靈を祭る松嶺神社

總光寺

ありて其他警察分署登記所町役場等の官署あり現今戸數五百余戸士族は多く東方なる山の手に居住し多く農桑の業に從事する者の如く商家は西北方に居住し町内本町荒町と稱る所は最も賑はひの地にして料理店及貸坐敷等あり之れより東方五六町にして山際にして總光寺と稱る巨刹あり其結構甚た壯大にして柱梁に細密なる彫刻を施したる等其樣西田川郡の善寶寺と稍々相類するものゝ如くなるも維新後衰頽の傾きありと云ふ境内樹木森々として東方は山に連り風致甚た幽凄なり時々庭上に郭公の飛鳴するを聞く等殆と世俗を忘るゝの思ひあり一巡して松嶺町本町旅店某方に投す

八月十一日早起飯後該家を發し最上川の東岸を川に沿ふて行く左方は山右方は川而して該道路は近頃開修したるものゝ如くにして平坦砥の如しと云ふにあらす其間に數個の小村落あり行くこと三里余にして最上川渡船場に至る該所を越ゆれは先に入る所の清川村なり日數を算すれは殆と十日

荘内男女風俗一班

間にして荘内の大概を巡見し其間月山の頂に登り又湯の濱湯の田の海邊に遊ひ靈泉に浴し鳥海の絶頂より奥羽の地を一望する等其艱難と愉快とは實に拙筆は能く盡し能はさるものなり本書に記する所は唯其一班を記したるものにして實に庄内の地は山水に富み海陸の産多く該地に一遊せらるゝも必す其價値あるを保す其風俗の概畧左に掲く

一風俗は男女とも質朴にして物堅き風なり衣服は多く該地に於て製する木綿縞の衣服を着し地質強く且つ重し多く黒ちみたる縞なり總て荘内人の嗜好は強くして地味なるものを好むの風あり町村の女は若きも老るも皆島田髷を結ひ甚た奇觀あり且つ女は巾廣き前掛を腰の全部に纒へり農事に從事するものは炎暑の候と雖男女とも紺若くは白木綿を以て深く面を蔽ひ僅に眼のみ出し一見して其誰たるや辨する能はさるものなり之れ汗の眼に滴るを防ぐものなりといふ其他藝娼妓の如きは絹布の衣服を着するものは少なり多く綿

服を着し其言語擧動甚粗雜にして無邪氣なるものゝ如し其他一般人に逢て禮を爲しときは双方にて必す(ナイ)といふ又他の家に至り取次を乞ふも(ナイ)と云ふを例とし農家は其夫を指して(トツ)と云ひ其妻を指して(ナヽ)と云ふ其男子の少年なるものを野朗と呼ぶ又海邊の村落に於ては其妻を(アバ)と唱へ娼妓を(ヲバ)と云ひ又(アチマ)とも云ふ其他方言枚擧に遑あらす所謂莊内言葉壹種の言葉を爲せり且つ女の名は多く何乃何江といふ人品は男女ともに色白に髮黑に天資の美を備ると雖も其粧色の法に至りては古風を存するもの多し

明治廿六年七月廿三日印刷
~~明治廿六年七月廿七日御届~~
明治廿六年八月十五日發行

著作者
兼發行者　山形縣羽前國西田川郡稻生村大字八日町乙卅九番地士族
大熊堯之

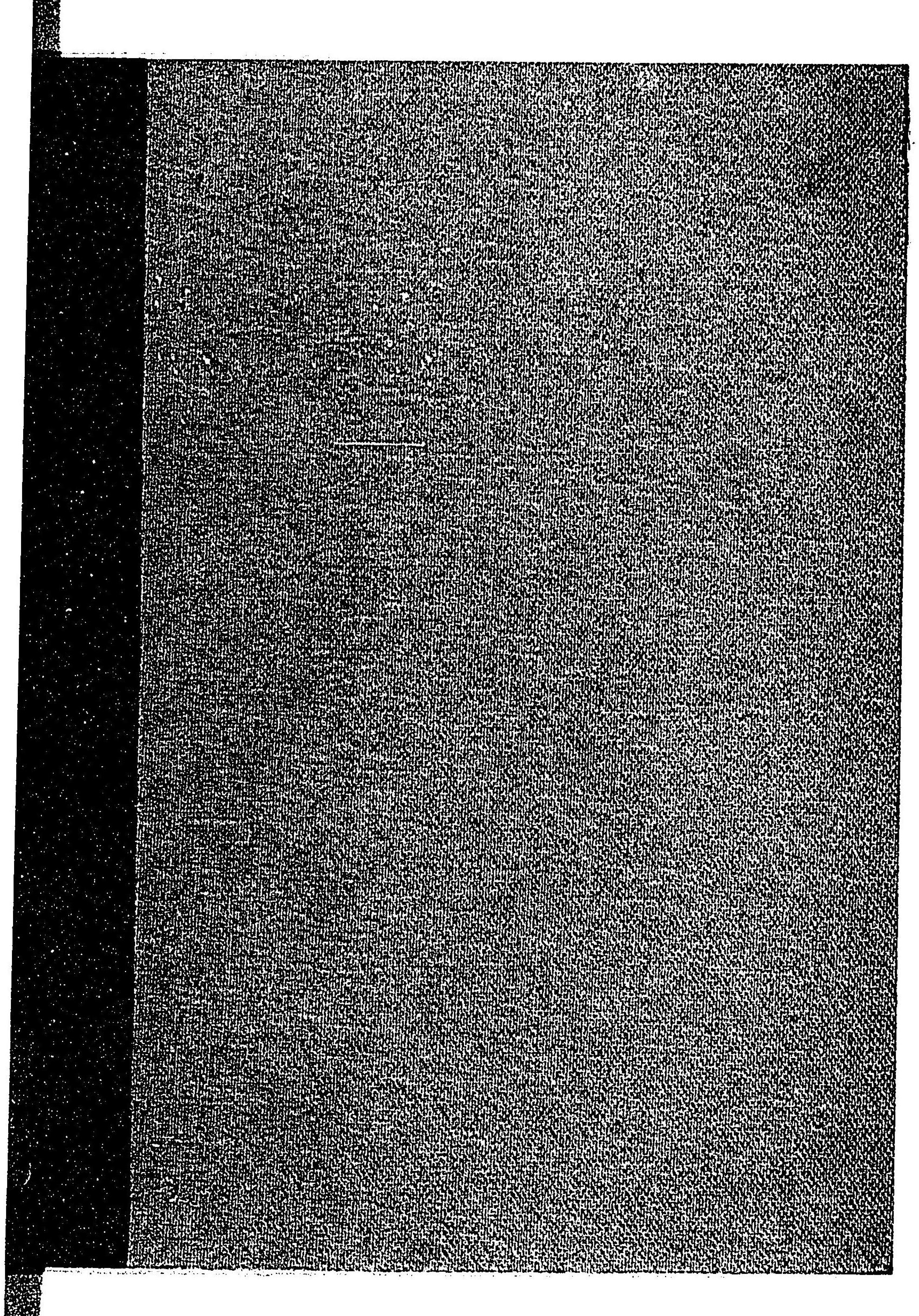
印刷者　山形縣羽前國西田川郡鶴岡町與力町乙八番地平民
山田保吉

印刷所　同縣同國同郡同町
保全堂

定價金[illegible]錢

[illegible]

七 X 506



特
4

023412−000−4

特29−485

庄内案内記

大熊　尭之／著

M26

ADC−0324